

け、我々を激励しているが如く見えた。「撃ちてしまん、鬼畜米英」、全員が敵愾心に燃えていた。

いよいよ、内地各地の大空襲が始まるのであり、私は、特攻志願も認められたか否かを思い、一日も早く戦場への出勤を待ち望んでいた。しかし、内地の空襲は激しくなり、本土防衛が緊急の大事となり、内外地の区別も無くなって来るのである。これからが、文字通り、戦地外戦務となるのである。

(一) 終わり・続く

私の人生記録

としての軍隊とは

岐阜県 堂前寅次

若い時の苦労は買ってでもせよ、と言われましたが、昔の人はいいことを遺してくれたものだ

と、年をとった今、つくづく思い返しています。

その私の歩んできた道の中での苦労と言えば、軍隊生活が、一番先に頭に浮かんで来ます。そこで、この軍隊の思い出を、作家でもない一市井人の私が、苦労の体験の一部を記録してみようと思つたのは、四十歳を遙かに過ぎてからでありました。

私は、大正五(一九一六)年、岐阜県の旧家に生まれ、昭和六(一九三一)年、学校を卒業しましたが、田舎の農家では現金収入の道はなく、鉄道工事、土木工事の手伝いなどし、トンネル工事終了まで、一年余りを無事に務め、一カ月の給料十五円をもって、母に渡したら、涙を流して喜んでくれ、早速、袋のまま神棚にお供えしてから「有難う、このお金で、お前の『銘仙の着物』を作るんだ」と、涙を流して喜んでくれました。この時、今まで、父母を何とも思っていないかつたし、ただ空気のようなもので、当り前のようになんとも考えませんでしたのに、こんなことで喜んで

くれるのかと、改めて親の存在を認識し、また、何物にも換えがたい親の有難さを、身に沁みて感じたのでした。

このようにして、適齢期に達し、満州の関東軍へ入隊、身体検査、一期の検閲と時を過ごして来ましたが、軍隊生活での酷しさを身にしみて感じる体験、初年兵について書き留めておきます。

初年兵時代

初年兵とは「新兵さんは、いつも暇なし、早飯、早糞、早駈けで、新兵さんは可愛いやなあー、また寝て泣くのかよー」、これは、ご承知の軍隊の消灯ラッパの譜の一つで、上の歌に当てはめて歌った一節です。

タンタンタンタン、タンテン、タンテンチー
チンテンチンテン、タンテンタンタ、トンター

(消灯ラッパの譜)

軍隊にはこうした替え歌が沢山ありました。新兵と言えば入隊して一年間は家の事や兄弟の事な

ど思い出す暇もないほど忙しく、初頭に書いたように、早飯、早糞、早駈けでなければとてもついて行くことはできなかったのです。

これが、当時の軍隊の本当の姿であります。いかにして要領良く一日の業務をやり遂げるか、また如何にして勉強の時間をとるか、これは、人それぞれの考え方により異なりますが、とにかく、洗濯をする暇の無いほど忙しかったのです。

これはあくまで初年兵に限ったことであり、二年兵や三年兵には当てはまらない。二年兵はモサと言つて新しく入隊してくる新兵が、今までやってきたことを全てやってくれることになり、従つて二年兵はすることがなくなり、唯モサーとしている事から、このモサと言う言葉が生まれたと聞いています。所謂二年兵になると神様のようになつて、ただ箸を持って飯を食べるだけになつてしまうのであり、後の事は全部新兵が女房役となつて、下着まで洗濯をしてくれるので、戦友となつた二年兵は、こうした事から神様と呼ばれる

ようになったのである。

従つて、古兵になると兵器から下着に至るまで新兵がやり、そのためにやるのが無くなり、ただボサツツとしてゐるしかないのである。こうした事はあくまで兵舎内に居る時だけで、演習や戦闘に出た場合は二年兵も三年兵もなく、あくまでも指揮官の指示に従つて行動をしなくてはならない。かと言つて軍隊は運隊とよく聞かぬが、そんなに旨い訳には行かない。忙しい中からもやはり暇を見て勉強をしなければ進級は難しいのであり、また上司からも認めて貰えない。

人間は暇な時より忙しい時の方が心が引き締まつてなにをしても具合良く事が進むのであり、また頭にも良く入るが、暇があつてノンペンダラリとしている時などはなにをしても旨く行かず、また勉強も中々頭に入るものではないと思う。よく忙し過ぎてと言ふ人があるが、やる気さえあればどんなに忙しくて何とか切り抜けることができるものだと思う。

さて、少し横道にそれたが本文に戻そう。

兵は起床ラツパの鳴る前に目を覚まし、コツソリと軍衣袴（服とズボン）身にまとい、まず便所へ行き出す。ものを早く出して班内に戻り、モサに気付かれないようにコツソリと自分の寝具を畳み、ラツパの鳴るのを待つ。起床ラツパが鳴ると同時に戦友の寝具を畳み、次いで班内の掃除を早く済ませて、週番下士官の「各班は点呼に整列！」と言う声が掛かると一斉に野外に飛び出す。

点呼が終ると今度は飯上げで駆け足で炊事場へ走る。炊事場では各中隊ごとに分けてあり、食缶に汁缶をそれぞれに持つて小走りに走つて帰る。帰るともう既に当番が食器を出して並べている。当番が盛りつけて揃つた所で全員大きな声で「戴きます！」と、大きな声で唱えるのだが、早くかき込まなければ戦友の食器洗いも遅れるし、また食器洗いが済むか済まない内に「食缶返納！」の声がかかり、百メートルもある炊事場まで走る。

帰るとすぐに「初年兵は演習に整列！」と声が掛かり、慌てて銃や帯剣を身に付けて廊下に出て、慣れない巻脚絆を足に巻きつけて野外に出る。

演習にもよりけりだが、初年兵の頃は演習に出ている時の方が心身共に休まるのである。演習に出ていると、一時間毎に休憩があり、タバコも吸えるし、またモサに気遣う事もなく、かえって気が楽であった。班内に居るとモサに気遣いはするし、その上休みも暇もない。昼食に帰るとまた飯上げ、返納、演習と忙しく、また、夕方風呂に行くにも全て駆け足である。その時には戦友や班長の靴下や下着を持って行き、取り替えたり、また禪までも洗濯をしたのであったが、また少し暇があれば、自分は勿論だが戦友の兵器の手入れや軍靴の手入れなど、いくらやってもやり切れない程度で、一日中走り回っているようなものであった。

夕食が終わって、もたもたしているうちに夜の点呼となり、洗濯も遂に夜となってしまう、ゴシ

ゴシやっていると週番下士官や週番士官に見つかり注意を受ける。勿論規則違反であるから叱られることになる。でも、こちらも好き好んでやっている訳ではなく、昼間に時間が取れなかったからであり、今頃洗濯しているのはなぜか、くらいのことは叱る方も百も承知の事だが、建前としては叱りおかねばならないと言う訳である。

「アー、早くモサになりたいなあ」とは、初年兵の皆の悲願であるが、軍隊には落第もないかわりに、またどんなに優秀であってもモサになることは絶対にできない。モサが満期するか転属でもない限り絶対にモサになることはできないのである。オーバーな言い方かも知れないが、初年兵と二年兵との違いは、天国と地獄と言う位に差があったのであった。

軍馬徴発について

農家の者にとっては、馬は重要な、家畜というより、家族の一員とも言えるのであるが、都会の

人にとつては縁の無い、珍しいことであろう。

人には徴兵令がある如く、馬にも徴発令というものがある。その思い出について書いてみるので認識をして頂きたい。

軍馬徴発令の思い出として、我が家にも軍馬の徴発令が来て、愛馬、栗毛が戦争に行くことになった。あれは確かに昭和十三年か、いやもしかしたら昭和十六年も知れない。私が二回目の召集で中国の遼陽市の部隊に行っている時かも知れない。

戦争が始まってからは農家に飼われている農耕馬にも徴発令が発動されて、我が家の愛馬にも来たのである。このとき私がいなかったために義兄の石田由造さんが金沢師団まで馬を引いて行ってくれたのだと、当時の父からの手紙で知つたのだった。その手紙も今は無いが、国内では大変な事になっているんだなあーと思つていた。家の馬は体格のいい馬で、非常に優しくおとなしい、人なつこい可愛い馬であつた。

夜など、トイレに起きた時などヒヒーンと鳴いて出口に顔を出してきて、顔を撫でてやると喜んで擦り寄つて来るのであつた。その馬が召集されて行つたと聞いて吃驚するやら可哀想やら、馬が戦場でどんな働きをせねばならぬかは知つていただけに、もの言えぬ動物だけに、この栗毛が可哀想で眠られず、夜ベツドの中でこんな苦労は私だけでたくさんだと思ひながら泣いた。

その馬も遂に家に帰ることもなく戦地で死んでいたのであろう。本当に惨めでならず、可哀想でならない。

どんなにか家に帰りたいと思つたことであろうに、またどうして家の人が迎えに来てくれないのだろうかと、どんなにか待ち焦がれたことであろうに。何百万という馬が、みんなこのような思いで斃れて逝つたであらう。

私が復員してから、由造兄に聞いた話だが、金沢に行く途中も寂しそうにして、由造の体に擦り寄つて来てどうにもならなかつたと話してくれ

た。

金沢まで夜通しで歩いたそうであるが、師団で引き渡す時にはヒヒーン、ヒヒーンと鳴いて由造の方を見ており、可愛くてならず別れるのが辛くてならなかったそうである。

由造兄は馬が大好きな男であったし、また度胸もよかつたし、馬もまた、由造の言うことを聞き、非常に馬を大事にした人であったからその気持ちは私にもよく分かる。その兄も昭和十八年に召集令状が来て、立川航空隊に入ることになり、今度は私が立川飛行場まで送って行ったが、遂にフィリピンで護国の花と散り永久に帰らぬ人となってしまった。

私にとってはかけ替えのない兄を失うことになり実に残念で、残念でならない。

戦争当時は子供たちは、家に疎開して来ていたが、その弘見や欽次も立派な家庭を持ち、いいお父さんになって活躍しており、誠に嬉しく有難いことである。

昭和の時代は思い出が多く、詳しく書けば切りがないが、戦争は人間の理性を失い、人間でなくしてしまふ恐ろしい行為であり、また、戦争をして得るところは何一つ無く、絶対にやってはならず、また、苦しむのは弱い立場にある女、子供や老人であることを肝に銘ずることである。